



衣川 実介

『金色の銅鐸 (どうたく)』

神戸市灘区桜ヶ丘から14ヶの銅鐸と銅戈(どうか)7本が発見されたのは1964年、今、神戸市立博物館に展示されているそれは、トンボや鶴、亀、狩をする人などが描かれ、国宝に指定されています。出雲の荒神谷からは1984年に銅劍が358本と銅鐸、銅矛が発見され話題になりました。しかし、弥生時代の人々がどうして一箇所にまとめて埋めたのかは分かっていません。

石器と土器しか知らなかった当時の人々は金属のピカピカ光る光沢、太陽の光を反射する表面を神秘的なものと感じたに違いありません。『鉄のふしぎ博物館』を見学に来る子供達は金色に光る鉱石が大好きです。「これ金や！」大声を上げ、持ち上げます。もちろん金塊を展示しているわけではありません。黄鉄鉱の結晶、黄銅鉱の結晶も金と同様の輝きを持っています。

弥生時代稲作が進み、村ができ大きくなって小さな国が出来上がり、近隣との競争が激化してゆきます。そんな中、村長(むらおさ)は村人の団結に心を配ったに違いありません。ある村長は朝鮮半島から、金色に光輝く小さな鈴、1.5cmほどのものを輸入したのでしょうか。その鈴の威力は抜群、村をまとめることに成功します。銅鐸が初めて我が国に入ったのはこんな事だったのだと想像します。その銅鐸は徐々に大きくなり、音を出す鈴から、置いて眺める大きな祭器に変化してゆきますが、まだ銅と錫を製造することが出来なかった彼らは、輸入した色々の青銅器を鑄つぶし再利用しました。そのため、銅鐸の成分は、錫が30~3%と、個々に大きく異なっています。銅鐸は弥生時代の多くの謎を秘めた、優れた文化遺産です。

どんな色だったのだろうか、どんな音がしたのだろうか。兵庫県立歴史博物館には復元された銅鐸を叩くことが出来ますが、本当の音かな？青銅の文化が進んでいた中国では周時代の銅と錫の配合率が以下のように決められていました。

「金の六斉(せい)」

品名 (読み)	銅 (Cu) %	錫 (Sn) %	用途
鐘鼎の斉 (しょうていのせい)	86	14	(かね、かなめ)
斧斤の斉 (ふきんのせい)	83	17	(おの)
戈戟の斉 (かげきのせい)	80	20	(ほこ)
大刃の斉 (たいじんのせい)	75	25	(はもの)
削殺矢の斉 (さくさつしのせい)	70	30	(やじり)
鑿燧の斉 (かんすいのせい)	50	50	(かがみ、ひうちがね)

「錫(Sn)の増大による青銅の色の変化

銅 (Cu) %	錫 (Sn) %	色
100~80	0~11	銅赤色、赤みをおびた黄色
89~85	11~15	赤みをおびた黄色 だいだいのような黄色
85~74	15~26	だいだいのような黄色 蒼白い黄色
74~50	26~50	白い黄色 幾分黄味をおびた白色

金属と人間の歴史 桶谷 繁雄 講談社 1965年

銅および銅合金の色、硬さに関する資料をお持ちの方はお教えください。



復元の銅鐸
和銅寛



銅鐸の絵
桜ヶ丘



黄鉄鉱

鉄を見る目がかかりますよ。
ぜひお越しください。

『鉄のふしぎ博物館』



むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください!!

ホームページと電子メールをご利用ください。
<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>
ryou@memenet.or.jp